

蛟堂報復録 6

鈴木麻純 Masumi Suzuki



アルファポリス文庫

地獄の沙汰も金次第——

業を背負う覚悟と金があるのなら——

その恨み、蛟堂に預けてみませんか？

悪いようには致しません。

「二週間以内に、」

——必ずや片を付けてみせましょう。

蛟堂店主 三輪辰史

目次

第一話 罪人は誰か

7

第二話 安達ヶ原

155

第一話 罪人は誰か

虫の音すら聞こえない、静かな夜だった。

蛟堂、中の間——岡山太郎は夕方に取り込んだ洗濯物を畳みながら、ぼんやりとテレビを眺めていた。画面の向こう側では紺色の背広に身を包んだアナウンサーと思しき男が神妙な顔で原稿を読み上げている。二人がいつも見る通りの、何の変哲もない夜のニュースだ。いつもと違うことがあるとすれば、画面の向こうで喋っているアナウンサー、彼独特の機械音声にも似た声が聞こえてこないことだった。

——何故か？

理由は至極簡単だ。画面の向こう側に問題があるわけでも、テレビに欠陥があるわけでもない。画面の右端には明るい緑色の文字でミュートと表示されており——つまり、消音に設定されているからだだった。

太郎が浅く溜息を吐きながらちら、と視線を向ける。卓袱台を挟んだ向かいで、先ほどから携帯を片手に質問と相槌を繰り返しているのが三輪辰史——蛟堂の十二代目店主であった。

かつて、異能者たちは歴史の表舞台においてもその活躍を見せていた。今では科学的に説明できる現象の多くが、人々に理解されていなかった時代の話である。近代化に伴い科学分野が発達するにつれて、仕組みの説明或いは証明の難しい力は非現実的な妄想・胡散臭いまやかしとして一般社会から遠ざけられるようになったのだった。

三輪家とは、こうして歴史の間に追いやられた異能者一族の一つである。

長く無名だったとはいえ、その起りは平安時代にまで遡ることだった。系図や家伝書を紐解けば先祖は安倍晴明に師事したと——そう記されている。尤も注釈の書かれた年号を見る限り、記述は虚構である可能性の方が高いのだが。

現在の三輪家で陰陽師を名乗るのは、当主の三輪三郎のみである。

そんな三郎は婿養子、つまりは外部から来た人間だった。三郎の子供たちのうち、長女初子は異能者ではなかったし、長男秋寅は調薬士、次女卯月は市子をしている。末子の辰史だけが陰陽道にも明るい、彼は他の異能者たちがその一生をかけて極めようとする分野のどれにおいても一定水準以上の能力を誇っている。

——現在の地位を固める為に、見境無く他の異能者との婚姻を繰り返した為なのだろ
う。

他のも——例えば狐憑きの一族として知られる高天家などに比べると、三輪家の人間が
持つ能力はあまりに不統一である。

「だからこそ、箔を付ける必要があったのさ」

辰史は以前、甥に皮肉っぽく語ったものだった。

無名であるがゆえに淘汰されずに生き残ってきた一族。そんな三輪家の祖先は江戸の
中頃に蛟堂を開いた。薬屋の看板を掲げるその裏で報復屋を営もうと思いついたのは、
当時義賊による偽善的な活動が流行っていた為なのだろう。しかし、長く続いた徳川の
世が終焉を迎え新たな時代となった時、かつて活躍していた義賊の姿はすっかり消えて
しまった。

攘夷、倒幕、そして明治維新と文明開化——江戸中期のような停滞期ならともかく、
激動の時代に義賊は不要である。民衆の期待は旧きを倒す新しい者にのみ注がれて、英
雄を気取った犯罪者たちの存在など一瞬のうちに忘れ去られてしまうものなのだ。必要
とされなくなった存在が淘汰されてゆくのは世の定めである。

蛟堂もその例に漏れない。混乱の世で見られたのは弱者対強者の図ではなかった。

旧幕府軍と新政府軍。力対力。

片や朽ちかけていたとはいえ、強大な二つの力がぶつかり合い、政権を求めて争った
時代だ。そこには両者の食い合いの末に生じた怨恨が溢れるばかりで、報復屋の出る幕
などなかった。揺れ動く時代に不安を抱きながら、ひそりと静まる市井とともに蛟堂は
一時裏の活動を停止する。

そうして後に新政府が勝利を収め、社会から旧時代の身分制度が失われた時——

当時の蛟堂店主は報復屋稼業の再開にあたり、その活動を大胆にも商業ルートへ転換
させた。この人物というのが、また独特な価値観と野心を持った男だったのだ。

曰く——「弱い者が無条件に守られるべきであるという考えを、私は好まない。どち
らも等しく自分とは無関係であるという点において、報復を願う者と報復を受ける者の
命は平等である。一方にとって悪であるという、ただそれだけの理由でもう一方を害す
るのは義侠心の表れというより密かな選民意識によるものだろう。確かに、異能者であ
る我々は凡人に比するべくもない力を持っている。三輪の先祖が悪を成敗しようなどと
いう大逸れた考えに至ったのは、密かな自負心の表れに違いない」——と。

だから報酬と引き換えに提供するサービスとして、報復を扱う。

唐突な方針の転換は一族の間に物議を醸した。当然である。彼——三輪忍人の考えは、彼自身が異能者であることを考えれば謙虚だと評価することもできるだろう。尤も、報復屋を廃業するというのではなく商売として成り立たせてしまおうと言うのだから、決して良識的な話ではなかった。

「初代の意向に反する」

そう異論を唱えた者も少なくはない。

しかし、当主権限を最大限に利用して報復屋の商業化を推し進めた忍人は、更に皆が驚くことをやってのけた。それが、当時一般的でなかった他一族の異能者との婚姻である。かつて異能者は己の一族に他の異能者の血が混じるのを好まない傾向にあった。純血至上主義、というわけではないが同族間での婚姻の方が、都合が良かったのである。やはり高天一族を例に出すことになるが——例えば狐憑き一族の男と霊媒体質の女が婚姻を結んだ場合に女が狐憑きの子を産む可能性は、男が同じ一族の女と婚姻した場合に比べて減少する。

より特異な力を——というより、いかに効率的に己らの技を伝えてゆくかが重視されていたのだ。

対して、忍人は純粹に力を求めた。

元より三輪一族には伝えるべき特別な技などない。陰陽師、山伏、巫女、市子、薬師に星詠み等々——何代かに一人はそこそこ優秀な人間が生まれるが、大抵の者が同業者からすれば三流と鼻先であしらわれる程度の才能しか持っていないかった。三輪一族は力を持たぬがゆえに、無名であったがゆえに、この時代まで生き残ってきたのである。

——そんな一族の純血に、どれほどの価値があるろうか。

血に縛られた過去を捨て、一族の未来に投資する。才能を富で買い、自らの一族に組み込む。どんな才能でも良い。少しでも強い力を持った子が生まれれば、その子供が未来の担い手となる。自分が無名な一族の将来を憂えたように、必ず——名を成そうと志を継いでくれる。何故なら、力ある人間は更に上を目指そうとするからだ。

古い慣習をひたすらに守り続ける他の名高き一族も、近い将来には三輪の名を笑えなくなることだろう。

幕末と明治——激動の時を生きた忍人は、新たな時代の到来を一族の転換期と捉えたのかもしれない。こうして現在の一族に繋がる基盤を整えた後に、忍人は没した。

血統よりも能力を重視した彼の息子は確かに有能な異能者で、父親の遺志を継ぎ生涯をかけて一族の更なる飛躍に努めた。その頃には商売としての報復稼業も軌道に乗り、

三輪一族は非日常に属する社会において、ようやく名声を手にしたのだった。富と力、そして名声を得た三輪一族がその後急成長を遂げたのは言うまでもない。言うなれば成り上がりの一族である。だから〈箔を付けよう〉というのだ。

少し話が逸れたが――

辰史はそんな一族の中でも天才と謳うたわれる異能者である。

幼い頃からその才能を評価されてきたせいも、性格には少々問題があると言われるものの力を頼ってくる者は多い。

辰史は物言いたげに見つめる太郎の視線を無視して、その奥へ眸ひとみを向けた。黒曜の瞳をすっと細める。それに気付いた太郎が視線を追うように、再びテレビへ視線を戻した。報道番組が続いている。

やはり、画面のアナウンサーは口をばくばくと開閉させるだけだ。唇の動きからその内容まで読み取るのは、辰史でも不可能である。

「音量、少し上げましょうか？」

気遣いのできる甥が、小声で問いながらリモコンに手を伸ばした――が、辰史は片手でそれを制した。「ちょっと待て」とでも言うように、前へ突き出した手の形を変える。

宝石店に強盗。指輪など数十点盗まれる――

人差し指で示した先には、そんな字幕が流れている。

数日前に、都内の宝石店に強盗グループが押し入ったと報道されていた。目の前で流れているニュースは、その続報だった。

「叔父さん、電話中にいいんですか？ 依頼なんでしょう？ 相手に失礼ですよ」

リモコンから手を引いた太郎が小声で注意してくるが、辰史は構わずにテレビの字幕を凝視ぼんやりし続ける。

実をいえば、電話と報道は無関係ではないのだ。

ニュースが次へ移ったとき、辰史はようやく口を開いた。太郎に、ではない。電話の相手に、である。

「まあ、そちらの事情は大体分かりました。ですが、本当にウチに頼って良いんですね？」水を溶びせてやるように問えば、先まで熱っぽく語っていた相手は僅かにたじろいだようだった。だが、それで良いのだ。決断は冷静でなければならぬ。情熱のままに決断をして、後悔しても遅いのだ。尤も、そう念を押してみたところで翻ひるがえした依頼者は今まで数えるほどいかなかったのだが。

案の定、今回の相手も程なく「お願いします」と頷いた。無言で返事を待っていた辰

史は、僅かに唇を歪ませ——開く。

「それでは朗報をお待ち下さい。一週間以内に、必ずや片を付けてみせましょう」

黒曜の瞳を挑発的に光らせて自信たっぷりに答えると、辰史は通話の切れた携帯を畳の上へ放った。胡座をかいていた足を組み替え、うんと一つ伸びをする。

卓袱台の上には茶封筒が一枚。丁寧に封の破られたそれからは、便箋の束が覗いていた。そのうちの一枚が既に開かれているのは、そこに相手の連絡先が書かれていたためだ。即ちその送り主は、先の電話の相手だった。

右手が煙草を求めて、無意識に胸ポケットを探る。一本取り出し、啜(く)えたところで、洗濯物に臭いが移るのでやめてください」

甥がびしゃりとそう言った。

「わかってるつつうの」

辰史は苦い顔で、真新しい煙草を灰皿へと放る。

すぐに煙草へ手が伸びてしまうのは、それがもう長年の習慣となってしまうているからだ。甥はすぐに苦い顔をするが、最近では本数を減らす努力もしているのだ。その証拠に、美しい紅色と白、幾重もの層からなる灰皿の上には同じように長いまま押しつけられた煙草が積まれている。

辰史は、灰皿から視線を外すように封筒から手紙を取り出した。

向かいから太郎の溜息が聞こえる。続いて、テレビの音量が上がる音。速報でも入ったのだろうか。ニュースでは再び、先の宝石店強盗に関する話題が取り上げられていた。

「最近、多いな」

視線を手紙へ向けたまま、辰史はぼつりと呟いた。太郎が相槌を打つ。

「強盗ですか？　そうですね。今月で四件目——だったと思います」

「それも、全部都内で起きた犯行だ」

「はい。だから同一犯なんじゃないかって話らしいですけど……」

言外にそんな疑問を含んだ甥の声に、辰史は苦笑する。持って回った言い方をしてしまうのも、辰史の悪癖の一つだった。人からは悪趣味と指摘されるが、別に趣味ではないし他意があるわけでもない。

軽く睨んでくる太郎に肩をすくめて、辰史は手紙を摘み上げた。

「それなら、連続強盗は今回の宝石店が最後になるな」

「えっ？」

にんまりと微笑んでやれば、太郎はぎょっとしたように訊き返した。そんな甥の反応

に気を良くしながら、手紙を束ねて立ち上がる。

自室に戻ると、辰史は文机ぶんぐいの前に腰を下ろした。

手紙に記された報復相手の名は矢代やしろ克海かつみ。彼はとある窃盗グループでリーダーをしてきたとの話である。そう、先ほどもニュースで流れていた宝石店強盗。太郎も言っていた通り、先月の初め頃から数えて四件目に当たるその事件は全て同一グループによる犯行だった。

同一犯。

ニュースではまだ仮定の段階である。犯人も特定されていない。しかし、辰史には断定できるのだ。当の本人——窃盗グループの連中から事実を聞いているのである。

依頼者は九人の男たちだった。

(奴らの話を鵜呑みにしていいのなら、な)

辰史は胸中でそう付け加えながら、手にしていた手紙の束から一枚を抜き出した。シンプルな白の便箋に、ボールペンで歪ひびな文字が並べられている。そこに書かれている内容は、先ほどの電話で確認した話と大体のところ一致していた。

依頼者たちは、矢代と同じ窃盗グループに所属していたらしい。

矢代はニュースにもなっていた宝石店強盗の後、盗んだ宝石を抱えて今は一人逃亡中との話だった。ここ二ヶ月にあった四件の窃盗も、まだ明るみには出ていない複数の犯罪も、計画を立てたのは主にリーダーであった彼なのだという。

「最初はゲーム感覚だったんだ。あんたにこんなことを言っても仕方がないが、俺たちは事件を起こしたことを後悔している。ニュースでも連日騒がれて、逃げ切れるとは思っていない。だから、自首したいと思っていた。矢代の奴にもそう言った。だが、あいつは宝石を持って一人で逃げちまった」

では、その裏切りに対する復讐なのかと問えば、男は少し迷った末に「いいや」と答えたのだ。辰史は手紙を読み返しながら、頭の中で男の話を反芻はんそうする。

「矢代は頭の良い男だ。自分勝手なところもある。だから、俺たちが自首しても警察に捕まらないかもしれない。仮に捕まったとしても、懲役刑ちやうえきで改心するような男じゃない。そんなあいつに引導を渡してやるのが、一緒に罪を犯してきた俺たちにできる唯一のことだと思うんだ。あんたが矢代に報復してくれて、奴から宝石を取り戻してくれたら、俺たちはそれを受け取ってすぐにでも警察へ行く。嘘じゃない」

何とも勝手な言い分である。

犯罪者が自らの意思で警察に自首し、罪を償いたいと言っている。それを頭から信用

してやるほど辰史はお人好しではなかった。彼らは自らの罪を明かしたが、真実を告げることが誠実さの証明になるとは限らない。一方で、嘘だと決めつけてしまうような証拠もない。

疑うにしても信用するにしても、決め手に欠ける。今の時点では判断ができないのだ。——さて、どうしたものか。

辰史は顎に手を当て、考える素振りをした。

ひとまず、依頼は受けている。依頼者たちが〈責任感〉などという大層な理由から依頼をしてきたようには思えないが、矢代と接触をすれば彼らの本音も見えてくるだろう。「今の段階じゃア、断る理由もないからな」

一人呟きながら、文机の上にある本を開く。蔵から出してきたばかりのせいか、少しだけ埃^{ほこ}っぽい。色褪^あせた茶色の表紙には——世界教訓集——と堅苦しいタイトルが刻字されている。文字通り、娯楽からは程遠い戒め^{いまい}の物語ばかりが収められた本である。

辰史は慣れた手でページをめくり、目当ての話を探した。収録されている話が多いが、その本に宿る思念は一つだけだった。

「おっと、これだ」

探していたタイトルを見つけ、手を止める。

——『罪人は誰か』

ページの頭には本文より僅かに大きな字で、そう記されていた。

「やはり、これが妥当だろうな」

辰史は内容を目で追いながら頷く。頷きながらも僅かに渋い顔をしたのは、かつて祖父がこの本を使った時のことを思い出したからだだった。

十年ほど前の話だ。

従兄^{いと}と仲違い^{なかつ}をしたその辺りの記憶には、苦いものが多い。

「罪人は誰か、か」

その問いは誰に向けられたものなのか。

感慨を込めて呟きながら、軽く眸を閉じる。目蓋^{まぶた}の裏には今より十も若い自分がいた。思春期にある、苛立ちと不安に彩られた顔で天井をぼんやりと見上げている。祖父や従兄、そしてもう一つ——その頃はまだ空想に思い描くばかりであった彼女のことを考えているのだろう。意識しなくても思い出してしまうそれは、忘れてしまいたい過去だった。

未熟で、理想がちで、少しだけ小賢しい。それが自分だったのだ。

辰史はその日、一人で店番をしていた。

従兄の丑雄と祖父である尊は二人してどこかへ出かけてしまった。恐らくは、報復屋の仕事に関わる用事なのだろうと思う。時折、尊はそうやって丑雄だけを連れてゆくことがある。それが、辰史には不満だった。

確かに報復屋の仕事は特殊である。

仕事で関わる人間は、依頼者や報復相手を含めて一癖も二癖もありそうな人間が多い。まだ子供だと侮られる自分よりは、丑雄を連れていた方がはったりも効くのだろう。堅苦しい喋り方に、面白いことなど何も無いというような敵めしい顔付き。人はそんな丑雄を見て「これは頼りになりそうだ」と納得する。余程親しくない限り——特に仕事においては、見た目で判断されてしまうのは仕方のないことなのだ。

どんなに非凡な能力を持っていても、それを一般に披露することは許されない。いくら胸を張ってみても、知らない人間からすれば辰史はただの高校生だった。

そんなジレンマを丑雄に零せば、あの気の利かない従兄は当然だという顔をした。元

より、丑雄は未成年の辰史が蛟堂の仕事に関わることを快く思っていない。

「そういうところも含めて、お前は子供だからな。俺には、尊翁がお前を連れていくと言う時の方が異常に思える。俺でさえ、尊翁を手伝い始めたのは二十歳を過ぎてからだっただだぞ。お前は少し甘やかされすぎだ。大人にも、甘えすぎだ。自覚しろ」

丑雄の言葉を思い出して、顔を擧める。あの従兄に何かを期待していたわけではなかったが、それにしても〈大人〉ならもう少し言い方を考えて欲しいものである。

(デリカシーのない奴め)

辰史は口の中で毒づいた。

(大人扱いをしると言っているわけじゃない。ただ、認められただけだ)

——仕方のないことだ。年齢だけは、どうにもならないものだから。

せめて従兄が代わりにそう言ってくれたら、自分は満足したのかもしれない。

辰史がまだ、家にいた時のことだ。

三輪邸と呼ばれた家には祖父がいて、父母がいて、姉がいた。尊は仕事で邸を離れることが多かったが、三輪一族の本拠地は京都である。周囲には血族も多かった。異能者であることを隠す必要のないその狭い社会の中で、辰史は特別だった。

姉姉らとは能力が違ったのだ。祖父から陰陽道や風水術、口寄せや薬術といった様々

な術の手解きを受けた。学び始めて数年で、跡継ぎ候補として育てられていた兄・秋寅を追い越してしまった辰史だ。周囲はこぞって辰史のこゝろを持ち上げた。

そんな辰史に苦い顔をしたのは、父と丑雄だけだった。

早熟すぎるのは良くない、と二人が口を揃えて言った意味が、今では分かるような気がする。能力ばかりが育っても、体の成長が追いつかなければ力を持て余すだけだった。今の辰史がそうだ。

そうして、認められる年齢まで待たねばならないのは不安だった。丑雄の言う通りだとすれば、最低ラインは二十歳である。まだ二年もある。

(御祖父様は、丑雄に蛟堂を継がせるつもりなのかもしれない)

必ずしも三輪家の当主となる人間が蛟堂の店主である必要はないのだ。尊の年齢を考へても、店の後継者には丑雄を指名しておいた方が安心だろう。経験の点で言えば、辰史より丑雄が勝っているのだ。そんな不安が胸を掠めた。

当主になるな、と言われたわけではないのにそれだけで否定された気になってしまう。暗に、頼りないことを責められているような気さえた。秋寅の前例があるから余計にそう思うのかもしれない。

今でこそ好き勝手やっている兄の秋寅も、かつては跡継ぎ候補だった。辰史が生まれ

なければ、今もそう遇されていたことだろう。丑雄と共に蛟堂を手伝っていたのも、秋寅だったに違いない。

跡継ぎとしての自覚があった頃の秋寅は、薬学以外にも真面目に学んでいた——とは姉の談だ。

「でも、兄さんには才能がなかった。しかも後から生まれたあなたにすぐ追い抜かれたものだから、さつさと諦めて戦線離脱しちゃったのよ」

そう付け加えた姉は、どこか腹立たしげだった。その顔を思い出すにつけて、兄は戦線離脱したのではなく、せざるを得なかったのではないかと思う辰史だった。

三輪一族は、能力至上主義だ。

外から婿に来た父の三郎は、やはり異能者としては少しばかり能力が低いせいで肩身の狭い思いをしている。もう何年も前に当主は交代しているというのに、依然として一族の年寄り連中は父ではなく尊を立てた。

——結局、自分は一族の中にあつた頃のように周囲から肯定されたいのだろう。肯定されることでまだ自分は特別なのだと確認し、安堵したいのだ。

「これが、甘えすぎることか」

辰史は重い溜息を吐き出した。

瘡だが、認めざるをえない。丑雄の言うことは正しい。

畳の上にごろんと仰向けになりながら、翳した手の甲をじつと眺める。頼りない手だ。見た目はもうほとんど大人と変わらないように見えるのに、その手はまだ何も掴んでいなかった。特別でありたいと願いながら、誰の期待にも応えられていない気がした。体とプライドばかりが一人前に育ってゆく。

時折思い出したようにそんな自覚をしては、腹立たしさともどかしさに胸を搔きむしりたくなるのだ。

丑雄は言わずもがな、尊の片腕のように働いている。一番上の姉はもう十年近くも前に結婚をして、己の家庭を持つていた。兄も、既に上海という地に渡って自立した生活を送っている。大学を卒業したばかりの二番目の姉でさえ、市子となる為に家を出た。何も為していないのは自分だけだ。大した跡継ぎ様だ、と恥じる気持ちもあった。

——早く一人前にならなければ。認められなければ。

プライドの問題だけではなかった。辰史が成長を焦る理由は他にもあった。思い悩んでいる月日の長さで言えば——もしかしたら、自分にとってはそちらの理由の方が重要なかもしれない。

物憂げな溜息を零しながら、辰史は翳していた腕を目蓋の上を下ろす。

眸を瞑り、訪れた闇にそつと意識を委ねれば思い出されるのは名も知らぬ女の顔だった。幼い頃に、幾度となく夢の中で会った女だ。

思春期を迎えてからは見ることもなくなったその夢を、脳裏に思い描く。

深い水底にも似た孤独な暗闇に、溶けることなく浮かび上がる白は女の肌だった。まるで胎児のように膝を抱えて蹲る、その腕の隙間から覗く瞳は赤い。言い様のない不安を感じさせる、暗い赤だ。潤んだ瞳を縁取る長い睫毛は頬に影を落として、彼女の表情をいつそう陰鬱なものにしていた。

彼女は静かに泣いている。はらはらと、涙を零している。

——その正面にあるのは、幼い自分の姿だ。

無力だった頃の辰史はしきりに女を気にしていた。少し離れた場所から「泣かないで」と訴えていた。自分こそ今にも泣きだしそうな顔をして、女の気を惹こうとしている。

けれど、いくら訴えてみたところで彼女の目に幼い自分の姿が映ることはないのだ。

しばらくそうしていた辰史は、やがて女にそつと近寄った。膝で摺り寄り、正面からじつとその顔を覗き込む。小さな掌をその頬に伸ばし、無意味であると知りながらも彼女の涙を拭おうとする。案の定、手はするりと彼女の顔をすり抜けた。

慰めることも叶わない。触れることも叶わない。では、どうすれば良いのだろうか？

途方に暮れながらも、辰史は女をじっと見つめ続ける。一人静かに絶望する彼女の顔は、ひどく美しいように思われた。そうして彼女を眺めるうちに、冷たく引き結ばれた唇に気付いてしまった辰史は、奇妙な感情に捕らわれたのだった。

自分でも分からない衝動に突き動かされて、辰史は女にそっと顔を近付けた。手がすり抜けてしまったことを思えば、唇が重ならないことは明白だった。しかし、それでも幼い自分は彼女に口付けようとする。悪戯いたづらをする瞬間のように、小さく胸を高鳴らせながら。

けれど、そのあどけない口付けが許されることはない。

あとはもう少しだけ彼女に顔を寄せるばかりであった辰史は、唇に触れる寸前で気付いてしまうのだ。背後の壁に張り付いて喉のどを唸らせている黒い獣に。

獣は女の足元から伸びている。紛れもなく、彼女の影だった。それは眸にあたる部分を彼女と同じように赤く光らせながら、じつとこちらを睨み付けていた。静かな威嚇おどろに辰史は怯え、後退あとずさる――

それと同時に、女は初めてその赤い瞳をこちらへ向けた。

――手を差し伸べようとしておきながら、獣に怯えて逃げた自分を責めているのか？

いいや。そうではない。

彼女の目に責める色はなかった。けれど、そこに辰史が映ることもなかった。獣とは違って、最初から最後まで彼女は辰史に気付いていないのだ。ただ、偶然にしては最悪のタイミングで交わった視線に、辰史はすっかり畏縮おそくしてしまった。

びくりと体を震わせ、慌てて後退る。気付けば最初にいた位置よりもずっと後ろまで下がっていた。背後は壁だ。それ以上逃げることはできなかった。

――怖かったのだ。彼女の背後にいる獣が。視線が交錯してしまったことが。

辰史は、ごくり、と唾を飲み込んだ。せえの、で顔を背けようと思った。が、瞳を逸らしたのは彼女の方が先だった。初めて見た時と同じように、彼女は膝に顔を埋める。その様子はゆっくりと萎しぼんでゆく花にも似ていた。

次第に赤みを失ってゆく瞳は、冷え切ったその心を表していたのかもしれない。最後に残ったのは深く沈んだ鳶色とびいろで、そこにはもう先のような悲しみや絶望すら浮かべられずにはいなかった。

(ああ、この人は……)

辰史の幼い胸に、自己嫌悪が広がる。壁に張り付いた影の口元が、にんまりと笑みの形に歪んだ。それはまるで、こちらが何もできないことを嘲笑っているかのようだった。

實際、辰史は自己嫌悪に陥りながらもその場を動くことができなかつた。もう一度彼女の傍へ寄り添いたいと思う反面で、体は恐怖に支配され、すっかり自由を失ってしまった。

——それが、幼い頃に見た夢の全てだ。

繰り返し、繰り返し、繰り返し。

同じ場所で同じ女を同じように眺め、同じようにその影に怯え逃げては後悔をする。次こそは、そう思うのにはやはり自分は怯えることしかできない。途方もない罪悪感と、ほんの少しの切なさで満ちた夢だった。

辰史は幼い頃に一度だけ、尊にその話をしたことがある。泣き腫らした目で悲しみを訴える自分に、祖父は優しく言ったのだ。「それは恐らく先見^{さきみ}だろう」と。

先見。先を見通す力。予知能力の一種だ。その能力は激しい事故の後や感受性の強い幼少期に、一時的なものとして発現することが多い。辰史の場合もそうだったのだろう。「お前は将来、その人と出会うことになるのかもしれない。今ではなく、いつか。きっと、お前がもう少し大きくなった頃だろう。だから、そんな風に泣かなくても良いんだよ」祖父はそうも言ったのだった。

以来、辰史は祖父にも分からないその〈将来〉が訪れるのを待ちわびている。

幼い頃、限定的に発現した先見の力は疾うに消え去ってしまっていた。女の実在を肯定するのは自分の記憶だけだ。歳を重ねるほどに、あれはただの夢だったのでないかという不安が強くなる。

——会いたい。

考えるうちに堪らなくなつて、辰史はほうと息を吐き出した。

——会わねばならない。

しかし会うためには、やはり一人前にならなければとも思った。今のままでは、彼女との邂逅^{かいこう}で祖父や丑雄の力を借りる羽目になつてしまうかもしれない。それでは夢の中に見た光景と変わらない。自らの力を誇示して、あの獣を従えなければ意味がないのだ。(大丈夫だ。あれは、ただの夢じゃない)

急いでしまう気持ちを抑えながら、胸中で繰り返す。

執着の理由は分からない。しかし、彼女を想うと目の奥がつんと熱くなった。目に見えない何かに圧迫されたように、胸の辺りが苦しくなるのだ。それは不慣^{ふびん}な境遇の女に対する同情や、憐れみといった感情ではない。けれど他人を想うことに不慣れな辰史に

は、その感情の正体が分からない。だから、恐らくは責任感のようなものだろうと
思うことにしている。

——なぜ、あの時の自分は彼女に恐怖したのか。

——どうして、その傍を離れてしまったのか。

（たかが、夢だ。夢の中で怪我をしたところで、現実には何が起るわけでもなかった。
なのに、俺は怖れてしまった。何もできなかった。遠くから「泣かないで」だなんて気
の利かない言葉を投げかけることしかできなかった）

それを、自分は悔いているのだ。己の性格を思うとらしくない気もしたが、他の答え
は見つかりそうになかった。幼子が女に口付けようとしていた記憶には、努めて触れな
いようにしていた。

女のことを考え続ける辰史の意識は、夢と現を往復する。

胸の底に深く沈んだ記憶が後悔を呼び覚まし、後悔は辰史が築いてきた自信に揺さぶ
りをかけた。自分はあの頃からどれほど成長しているのだろうか、と自問し——その答
えを知る為にも彼女に会わねばならないのだと、思考は振り出しに戻る。

「もしも、あの時……」

——影に怯えず、彼女の手を取っていたら。その傍に寄り添っていたら。あの夢の終

わりはどうなっていたのだろうか？

途方に暮れた辰史が、ぼんやりとひとりごちた時である。

ふと、辺りに甘い花の香りが漂った。

思考を中断して、辰史は上体を起こした。疾うに読むのをやめていた本がぱざりと胴
の上から落ちる。首だけで辺りを見回せば、僅かに開いた格子窓で一羽の黒揚羽が羽を
休めている。

「探女——」

囁くように呼べば黒蝶はふわりと宙を舞い、広敷に舞い降りた。辰史は横目でそれを
眺めながら、祖父から教わった呪を唱える。すると、それは瞬く間に人間の女に姿を変
えた。

探女——尊の式神である。

若かりし日の祖母をモデルにしているらしい。人型の彼女は長い黒髪に理知的な眸を
した大和美人で、例えば薙刀などを持たせれば巴御前を思わせるような——そんな風貌
をしている。

実際の祖母も、伝承に聞く巴御前と同じように美しくも剛胆な人だったようである。

彼女は先見の力を持つ異能者だった。幼少期の辰史にこの能力が現れたのは、祖母の影

響だったのではないかと言われている。

先見の能力を持つ者は少ない。

感受性の強い幼少期にその力が現れる者は、異能者の中に一定数存在する。しかし〈未来を覗く〉という、禁忌とも言うべき能力が永続することは稀である。辰史のような場合を含めて、その力は一時的かつ発現条件を限定されていることがほとんどである。神に仕え、神託を受ける巫女がそうだ。

幼い頃の辰史のように予知夢をみる者、天啓のように閃きとして未来のヴィジョンを得る者、力を発現するために水晶や水鏡、炎などといった媒体を必要とする者——と、未来を予見するために踏まねばならない手順は術者によって様々である。

祖母はそんな先見の力を持つ異能者の中でも、更に特殊だった。

彼女の目には会話をしている相手の未来が映っていたのだという。あたかも映画の予告編を観ているかのように、他人の人生が視えてしまう。能力に、限定されたところがなかったのである。

視るための手順というものがなく、また視ないための手段も存在しない。

辰史はそんな彼女を恐ろしい人だと思わずにはいられない。

生まれながらに、先を全て見通すことができた祖母。他人の未来さえ、そうも容易く

見えてしまうのだ。物心付いて自分の持つ特異な能力に気付いた時には、既に自らの死までが視えていたはずだった。

——自分の生を自覚したと同時に、死の瞬間まで知ってしまった。

普通ならそこで恐怖し、身動きが取れなくなってしまうだろう。その時の祖母は、一体どんな気持ちだったのだろうか。絶望を抱きはしなかったのだろうか？

大抵の人間は、自分は〈死なない〉と過信しているものだ。不老不死、という意味ではない。

現代の日本はそこに平和だ。いつ殺されるとも分からない戦場でもなければ、その筋の人間でもない限り拳銃などにも縁がない。医療の現場で働いていれば人の死に直面することも多いだろうが、それでも自分が次の日に死ぬかもしれないと考える者は稀だろう。また、そういった自身や周囲の死を連想させる話題は嫌われる傾向にある。

それはきつと〈その時〉が来るまで、少しでも長く死への恐怖を忘れていたいからなのだろう。

そんな周囲と違って、常に己や他人の死を意識していなければならなかった祖母は、しかし自らの運命を悲観したりはしなかった。その能力を恨むこともなかった——ようである。実際のところは分からないが、少なくとも周囲にそう思わせることはなかった。

「あれは気の強い女だった。ある日突然、何の前触れもなく私の前に現れへ私はお前様の運命なのです」と、そう迫ったのだ。さすがの私も驚いてね。嘔然あぜんとしている間に、あれの強引さに流されてしまった。この私が、だ」

尊は妻のことを相当に愛していたようで、正月など一族が顔をつき合わせて酒を飲むような機会にはよく彼女のことを話した。

——似合いの夫婦だっただろう。

辰史は生前の祖母に会えなかったことが残念でならない。

目の前の探女さぐめという式神と祖父の口ぶりから、祖母を想像する——成程、完璧な祖父に見劣りすることなく隣に並べる女性が存在したとすれば、尊の語る祖母のような人だろうと思われた。

祖母は疾うの昔に亡くなっている。孫の誰も祖母と会ったことがない。当然だった。彼女は自分の子を産んですぐに、この世を去ったのである。先見の力を持つ異能者は短命だ。その特異な能力を危険視され、殺される者もいる。視えすぎることには耐えられなくなつて自ら命を絶つ者もいる。それが予定された死なのか、それとも定められた運命に抗つた末の死であるのかは未来を視る力のない者には分からない。

異能者と言つても、所詮は人間だ。修行の過程で多少は鍛えられるかもしれないが、

その心と体が人間の限界を超えることはない。過ぎたる能力を持つことは、人間としての不幸だった。

「坊、」

呼ばれて、辰史はハッと我に返った。

探女さぐめの黒い瞳がこちらをじっと見つめている。感情の一切浮かばぬ式神の目は、辰史の口元に注がれていた。女の艶めかしい唇が僅かに開く。「坊。あの時とは、どの時の話でしょうか？」問われて、辰史はきよんとした顔で訊き返した。

「あの時？」

「もしも、あの時……」

探女さぐめの目がすつと細くなる。女の赤い唇から再生された声は、その外見にそぐわぬ少年の声だった。聞き覚えのある声に、辰史はカッと頬を染める。それは誰のものでもない、自分自身の声だった。何の気も無しに呟いた言葉だったが、改めて人の口から聞かされると恥ずかしいものがある。

「何でもない！ 少し考え事をしてただけだ。お前の気にするようなことじゃない」慌てて否定をすれば、探女さぐめは形の良い眉を僅かに歪ませた。では何を考えていたのか、と思考しているようにも見える。或いは無言のうちに答えを求めていたのかもしれない

が、辰史は黙秘を貫いた。

——一人での留守番に耐えかねて、記憶の海に逃避していました。
(なんて、言えるか！ いくらこいつが式神だからって)

唇を固く結んで睨みつける。探女の黒い目も辰史をじっと見つめていた。こちらの真意を探り出そうとする、深淵のような瞳だ。

こういう時には、式神の生真面目さと融通の利かなさが仇となる。そんな瞳と睨み合うほどに、彼女の望むような答えを持たない辰史は口を閉ざさなければならなかった。

仮に、正直なところを話したとして——羞恥心を持たない彼女が、繊細な男心を理解してくれるとは思えない。

「はあ、それだけです。しかし坊、私には理解不能です。何故その程度の瑣事を隠す必要があったのでしょうか？」

探女は何の躊躇いもなく、そんな問いを続けるだろう。

非人間的な黒い瞳の詰問に、羞恥心の理由まで説明させられる自分——想像しただけで百回は死んでしまえそうな光景だった。

十秒、二十秒——

更に一分、二分、三分——

拷問のような時間が過ぎる。辰史の額にはじつとりと脂汗が滲んでいた。どうにもならない攻防の先、どちらが勝利を得たとしてもそこに実りはない。酷く無駄な時間だ。そうして十分が過ぎた頃に、探女もようやく睨み合いの無意味さに気付いたようだった。

「どうやら、坊の個人的な問題のようですね」

ふう、と溜息を吐く。普段は無機的な式神の顔を彩るのは、微かな憂いだ。

「ああ」

居心地の悪さを感じながら、辰史は肯いた。

「それなら、良いのです。坊がまた丑雄さまに何かを仕掛けようとしているのでなければ、こちらにも問題はございません。尊さまに心労をおかけすることのないようお願いします」

釘を刺す探女の言葉だった。感情の起伏が乏しい瞳には非難の色がある。

「は？ 何で丑雄が——」

式神の口から出たのは思いもよらない従兄の名だった。

「おい、俺が丑雄に仕掛けるって何だ」

「坊はすぐ丑雄さまに噛み付かれますので」

「違う！ あいつが俺に突っかかってくるんだ」

「……そういうことにしておきましょう」
 含みのある間をおいて、探女は頷いた。ついでに肩まで竦めてみせる。術者の腕が良
 いからか、その仕草は妙に人間的だった。

——何で丑雄が「さま」付けで、俺が「坊」なんだ。

馬鹿にされているような腹立たしさを覚えながらも、反射的に出かけた問いを飲み込
 む。

人間的な仕草とともに言葉を紡ぐ探女の顔は、先からずっと無表情でそのアンバラ
 スさは滑稽に思えるほどだった。

式神は親しみや愛情などという感情を持ち合わせてはいない。オブラートに包む、と
 いう言葉も知らなければ冗談を言うこともない。真顔でからかうなんて気の利いた真似
 もできない。彼らが持つのは、術者に対する忠誠心だけだ。その口から出る言葉は彼ら
 の認識する全てである。

(つまり、こいつにとつて俺は幼児のようなものなんだろうぜ)

小さく、舌打ち。問いを飲み込んだ理由は、答えが分かっていたからだ。面白くない
 事実を確認して、更に不機嫌になる自分の姿が目に見えかぶようだった。

「まったく、お前まで俺のことをガキ扱いしやがって」

「申し訳御座いません」

謝りつつも、やはり否定の言葉はない。辰史は唇を歪めて「まあいい」と呟いた。

「その様子だと依頼人を見つけて来たんだろう？ 早く話せ」

すぐ近くに転がっていた万年筆とレポート用紙を手取る。表紙を開けば最初の数
 ページは丑雄の神経質そうな字でびっしり埋められていた。見難い、と眉を擡めながら
 内容を確認。片付けても良さそうだと判断して、切り取っておく。変なところで大雑把
 なあの従兄は、時折こうしてメモを片付け忘れることがある。

——やれやれ。世話のかかる奴だ。

肩をすぼめながら、辰史は新しいページに日付を書き込んだ。その様子を見ていた探
 女が、頃合いを見計らって口を開いた。

事の仔細は、こうである——

新興宗教。

それは古来信仰を集める伝統的な宗教とは異なった、新しい宗教のことを指す。その
 中には霊感商法による悪質な勧誘、救いを盾にした犯罪行為などで世間を騒がせる団体

もあり、昨今ではカルト教団と同一視されることも少なくない。これを嫌う宗教家たちは、新興宗教・カルト教団と区別をつける意味で〈新宗教〉という呼称を用いているようだ。輝広教も、近年創始された新しい宗教の一つである。

団体はここ十年ほどで急成長し、メディアに取り上げられることも少なくない。尤も、それはマスコミや世間からの好意を意味するわけではなかったが――

「人類の幸福と繁栄、地上の楽園化、神々との決別を目指して！」

今時、ファンタジーやゲームの中でも叫ばれないような思想だ。大衆が向ける興味は、そんな非現実的な主張を声高にする彼らへの冷やかかしだった。オカルトマニアや宗教研究者から見ても彼らの活動は馬鹿馬鹿しく、またその教義は突拍子もなかったのである。輝広教は「地上にあまねく輝きをもたらず」という漠然とした教義を掲げ、〈ヘイレル〉と呼ばれる存在を主と仰いでいた。

ヘイレル。Heil――

ラテン語では Lucifer――ルシファーという。

一般的にもそちらの呼び名が有名だろう。光を掲げる者、の意を含む墮天使である。

キリスト教において、神と人類の敵であるとされる悪魔サタンと同義語ととられることもしばしばである。ルシファーはその名が示す通り、明けの明星みよしやう或いは金星にも例え

られる光の天使であった。かつて彼は創造主たる神に反逆し、地に墮おとされたとされている。

「ヘイレルが天から墮ちたことにより、地上には光が溢れるようになりました。また、彼はその際、人間に知性と炎をももたらしているのです。それは何を意味するのでしょうか？ すなわち、今日の人間があるのはヘイレルの導きによるものなのです。地に墮とされた彼は、それでも猶なほ人間を横暴な神の支配から解放しようと活動しています。

創造主たる神こそが絶対であると洗脳された人類はそれに気付いておりませんが、ヘイレルこそが真に人類の味方なのです。ヘイレルの徒である我々は、無邪気にも敵を崇あがめる同胞の目を覚まそうと日夜布教に励んでおります」

駅前でそんな演説をする輝広教の信徒を、辰史も見たことがあった。目に痛い黄丹色おうたんしきの衣服で身を固め、

「我々は今こそ自立の道を歩み、真の楽園を勝ち取るべきなのです」

と口を揃えて言う光景を思い出す。非現実的な世界を知る辰史の目にさえ、彼らの行動は異様に映ったのだった。

「……わざわざ日本でやる必要があるのか？ その活動」

本人たちの前では呑み込んだ指摘を、探女さぐめに問う。

「敵を崇めるも何も、日本人の多くは西洋宗教に無関心だろう。学術的な興味を抱いて研究している奴は少なくないかもしれないが。困ったときに祈る相手だつて神道系の神がほとんどだ。ああ主よ、なんて十字を切つてみせる奴なんかそうそういないぜ」

辰史は大仰おちやうに肩をすぼめた。返す式神の言葉は淡々としている。

「だからこそ、でしょう。無関心だからこそ乗せられやすい。吹き込まれた知識を偏かたつたものであると認識することができずに、納得してしまふ。一方でそういった胡散臭い団体を迫害するような者はこの日本には存在しないのですから、活動するにはもつていいだというわけです」

「ふうん」

そういうものか。辰史は相槌を打つ。探女さぐめは、更に説明を続けた。

「輝広教において、教祖は〈明星〉と呼ばれます」

彼らの崇めるヘイレルが明けの明星に例えられるためだろう。

現在の〈明星〉は名を石垣直央いしがきなおという。二十二歳の青年であるとのことだった。得体の知れないカルト教団をまとめるには随分と若い。しかも彼が〈明星〉になったのは更に今から四年も前の話である。

「石垣直央の父親は輝広教の開祖であり、先代〈明星〉でもありました」

世襲か。と、辰史は呟く。

「けど、それにしておかしいな」

「おかしい、とは？」

探女さぐめが義務的に問い返す。

「それくらいの歳なら、まだ父親だつて健在だろう。よっぽど遅くに子供を作ったんじゃないければ、うちの親父と同年代かも少し若いはずだ」

「でしょうね」

「婿養子で何かと風当たりの強いうちの親父でさえ、まだ当主を降りるつもりはないと言っているんだ。まして開祖として宗教団体を興したような熱意ある人物が、そんなに早く教祖の座を譲ると思うか？ 人を集めるためのパフォーマンスにしても無謀すぎる。高校生教祖と言えば注目は集まるかもしれない。が、それを頼りなく思う奴も出てくるはずだ」

言つた後で、辰史は苦い顔をする。

——まるで、自分自身を否定しているようだ。

人を集めるためのパフォーマンス。注目は集まるかもしれない。しかし絶すがるには、頼りない。何気なく口にしたそれらの言葉は、他人から見た自分を的確に表しているよう

に思われた。

そんな辰史の微妙な表情には気付かなかったのだろう。式神は淡々と答えるのみである。

「いいえ。譲らざるを得なかったのです」

「譲らざるを得なかった？」

理由が分からずに、辰史は小首を傾げた。語尾を上げて続きを促す。

「不慮の事故——と、依頼人は申しておりました」

探女の手が懐から古びた新聞を取り出した。発行年は四年前になっている。辰史は新聞を受け取ると、紙面を眺めた。小さな赤枠で囲われた記事を見つけて読めば、飲酒運

転の男がガードレールに衝突し死亡とある。

「へ氏は新興宗教団体、輝広教の責任者だった」ね。成程、それで息子が急遽親父の跡を継ぐことになった、と。そういうわけか」

「はい。石垣直央は元々、信者たちから〈明星の子〉と呼ばれ慕われていたようです」

「〈明星の子〉か。そのまま、教祖の子を意味するわけではないだろうか？」

「はい。石垣直央は幼い頃に一度だけ心肺停止からの生還を果たしているそうです。この出来事は輝広教信徒たちの間で〈ヘイレルの奇跡〉と呼ばれました」

——これこそがヘイレルの意思である。

開祖も息子の生還をそう喧伝して回ったのだろう。

——主は我らを救うため、私の息子を地の底から再びこの地上へ使わした、と。

こうして石垣直央はヘイレルの子と同義である〈明星の子〉として再誕した。それを知る信者たちにしてみれば、開祖の死と若すぎる〈明星〉の誕生も何ら問題ではなかったのだ。むしろ先代の醜聞とさえ言えるその死は、新しい〈明星〉に悲劇的なエピソードと新たなカリスマ性を与えたとも言える。

「主は全てを知っていた。ゆえに相応しくない先の〈明星〉を見捨て、自らの子を救世主として立てたのだ」

「しかし大いなる父に愛されたが故に〈明星の子〉は地上における父を失った」

「天から堕ちた。それゆえに〈明星〉の進む道は険しい。我々は信徒として新たな〈明星〉を支えてゆかねばならない」

こうして輝広教は以前より一層、熱心な布教活動に励むようになったのだという。

「薄ら寒い話だな」

まるで別世界の話だ。辰史は理解不能といった風に眉を顰めた。

「何でそんな電波な宗教にハマる奴がいるのか、俺には分からない」

「何かを抛り所^よにすることで、心の平穩を得たいのでは？ 何も信じることなく生きる人間の行動には、自己責任という言葉が付きまといまます。人生に対する不満も、失敗も、全て自分自身が招いたこと——他人のせいにするだけの横暴さや、力のない人間は常にそう考え続けなければなりません。自己を持つ人間にとって、自分自身を否定しなければならぬ状況は何より辛いものでしょう」

端^{はな}から人間の心理を理解する気のない式神は、酷^{しく}辛辣^{しんろう}だ。

身も蓋もない。そう思いつつも、返す言葉を見つけれず辰史は口を噤^ぐんだ。丑雄がこの場にいたのなら、そんな探女^{さぐめ}の言葉に「それこそ救いがない」と憤慨^{ふんがい}しただろう。得意の救いだとか報いだとかいう言葉を使つて、神に救いを求めるしかない人間の心情を説明してくれたのかもしれない。

(俺も無神経さでは探女^{さぐめ}のことは言えんからな……)

胸中で呟く。人情の機微^{きび}に疎^といことは自覚しているのだ。ただ、今まであまり気にせず通り過ぎてきた分野だけあつて、少し意識を試みてみたくところで理解できるものではない。

——まあ、気が向いたら丑雄に訊いてみるか。

辰史は珍しくそんなことを思いつつも、質問を変えた。

「依頼者は？」

「開祖の時代から輝広教の運営を手伝う九人の幹部。そして一部の信者です」

急な話題の転換にも、式神は淀みなく答える。

「多いな。新しい教祖はワンマンなのか？」

「そう表現するのも——間違いではないのでしょうかね。彼らは〈明星〉のやり方に失望した、と申しておりましたから」

「失望？」

と訊き返したとき、丁度用紙の一枚目が埋まった。「おっと」辰史は呟き、万年筆を置く。それに気付いた探女^{さぐめ}も唇を閉じた。しばし問答を中断して、内容を確認。書き漏らしはないようだった。辰史の手がページをめくり、再び万年筆を取る——と同時に探女^{さぐめ}も話を再開する。

「はい。彼らの話では、新しい〈明星〉は入信者に多額の入会金と会費を要求し私腹を肥やしているとのこと。元々、輝広教には入会金や会費を取るといったシステムは存在していませんでした。依頼人たちは特に熱心な信者で、それゆえに石垣直央の裏切りが許せないようです」

「裏切りねえ」

「自分たちは純粹にヘイレルの教えを信じ、人類を救うために活動してきた。そのために家族や友人からの信頼を失った者も少なくない。であるというのに、主の代弁者たる〈明星〉が信徒を苦しめている。これは許されることではない——とのことです」

不正に金を搾り取られる信者たちを救おうにも、頼るべき者がいない。本来彼らを救うべき教祖が、敵対者となってしまうているのだ。それでも盲目的に教祖を信奉する信者の一部は、法に背くような行為で資金を得ているようである。

——彼らのやっていることは許されることではない。が、それも元はと言えば〈明星〉の強欲さが招いた罪である。信者のほとんどは根が善良で、人類の繁栄と幸福を心から願っている。だからできれば、警察を頼って彼らを売るような真似はしたくない。

それが依頼者の言い分だった。

胡散臭い、と辰史は思う。教祖を排除できるような人間たちが、道を外れた仲間を肅清できないはずがない。逆に言えば、仲間を許せる寛大な人間たちが、自分たちの教祖を許せないとも思えない。そこには矛盾が存在する。

——ということは、依頼人たちにも警察に頼れない理由があるということだ。

「へえ。報復屋に依頼するような奴らが善良ねえ……」

辰史は皮肉っぽく唇を歪めた。

「へイレルは傲慢な神の手から人類を救う為に、天使の翼をもぎ取り墮天した。自分たちも教団の膿を出し、一般信者を救うために手を汚す覚悟である」と、彼らはそうも言っておりました」

探女は眉一つ動かすことなく依頼者の言葉を代弁する。辰史には苦笑することしかできない。

「よく分かった。つまり、かわりあうだけ無駄だということだろう」
ばちん。

聞いた話を全て書き終えた辰史は、万年筆にキャップをすると、レポート用紙とともに卓袱台の上へ放った。咎めるような探女の視線が突き刺さる。

「こんなのを御祖父様が相手にするかよ」

「しかし——」

唇を尖らせる辰史に、探女が何かを言おうとしたときである。ガラッと引き戸の開く音がした。そこに、尊と丑雄の声が続く。

「ただいま、辰史」

「帰ったぞ。大人しく留守番をしていたか？」

辰史がそれに答えるより早く、丑雄の顔がひよいと広敷から覗いた。

「何だ、探女もいたのか。依頼か？」

向き合っている辰史と探女の姿を認めたその瞳に、深刻な色が浮かぶ。

「依頼というほどのものでもないさ」

そう。依頼というほどのものではない。

胡散臭いカルト教団。金儲けの道具として人の信仰心を利用する悪徳経営者。己の利を優先するがゆえに対立する教祖と幹部。どこにでもあるような構図だ。

彼らは報復屋という存在を知らなければ、内部分裂を起しただけだっただろう。そうして、世の中にまた一つ新しいカルト教団が増えていた。依頼を受けなければ今からそうなる。ただ、それだけの話だった。

辰史はレポートを丑雄に渡してやりながら、掻い摘んで話した。

従兄は静かに経緯を聞いている。最低限の説明と相槌。説明は淡々と進み、もの十分程度で二人の間には会話がなくなる。

「もし彼らの訴えが真実だとすれば、見過ごしてはおけない」

話を聞き終えた丑雄が、気難しい顔でそう言った。見逃していることがないか確認しているのだろう。レポートの上を往復する瞳は、獲物を品定めする猛禽類のように鋭い。そんな従兄の顔を眺めつつ、辰史は答える。

「いや、まあ確かにカルト教団は見過ごして良いものじゃないのかもしれない。信仰を餌にした悪徳商法も然りだ。お前の言う通り、こいつらみたいな稼ぎ方は良くないけど、俺たちが関わるような相手ではないと思うぞ。仮に信仰が本物だったとしても、こいつらは救世主ごっこに酔ってるだけだ」

従兄の台詞を予想していなかったわけではないが。

主張する辰史を、丑雄は冷たく見返した。

「いつも俺に感情的になると言うお前が、珍しく決めつけるじゃないか」

皮肉めいた言葉に、辰史は口を噤む。

「判断をするのは、お前じゃない」

丑雄はびしゃりとそう言った。その手が、いつの間にか広敷に腰掛けていた祖父に、レポートを渡す。辰史は従兄の動作につられるようにして、祖父に視線を向けた。

「……どうなさいますか？ 御祖父様」

沈黙で従兄の指摘を肯定しながら、問う。

渡されたレポートに目を通していた尊はやがてスツと顔を上げた。

「探女」

深い憂いを帯びた声が式の名を呼んだ。じっと沈黙を守り、主人の命令を待っていた

式の姿は、その瞬間再び黒蝶に戻った。年齢のわりには皺しわの少ない指先が式神を誘う。ゆらゆらと中空を飛んでくる蝶の姿を見守る瞳の色は、優しい。

やがて、蝶が静かにそこへ舞い降りたのを見届けると尊は口を開いた。

「依頼者から話を聞いてみることにしよう」

口元を彩るのは、奇妙な笑みだった。依頼者への同情ではない。苦笑でもない。辰史は怪訝に思いながら、真意を探ろうと祖父の顔をじっと見つめようとした。

それが出来なかったのは、次の瞬間に側頭部を小突かれたからだ。

「あだっ」

間拔けな悲鳴を上げて、辰史は思わず尊から視線を外してしまった。隣では元凶の従兄が肘を突き出しながら「ほら、言っただろう」と、口元をにやつかせている。妙に得意気な、腹の立つ顔だ。そんなことを思いながら、辰史はすぐさま広敷に座る従兄の背を蹴り上げた。

浅く座っていた丑雄の姿が、視界から消える。胸むねの空すくく思いだ。ついでに頭の中から、祖父の浮かべていた奇妙な笑みへの疑問もすっきり消し飛んでいた。

「辰史っ、お前というやつは……!」

腰のあたりを押さえながら、丑雄が立ち上がった。

「何だよ。先に手を出してきたのはお前だろうが」

「お前には軽い冗談も通じないのか」

「通じてるさ。だから可愛い冗談で返してやったんだよ」

ふん、と台詞とは裏腹に可愛げなく鼻を鳴らす辰史に、丑雄の顔が引き攣つった。

「そっか」

低い声が領いた。引き攣つった唇を無理やり笑みの形に歪める。そんな従兄の表情には気付かずに、辰史は「そうさ」と胸を張って答える。ぴしっと空気がひび割れるような音が聞こえた気もするが、現実的に考えて不可能なので気の所為せいだと思うことにした。

「やはり、俺には冗談の素質がないらしい」

「ああ。素質ゼロだ。もっと励めよ」

「そうだな。俺も、たまにはお前を見習った方が良いのかもしれないな」

不吉な宣告とともに長い腕が伸びて、辰史の足を掴んだ。抗議は間に合わない。視界の端では祖父がやれやれといった顔をしている。辰史は引き摺ずられないよう畳に爪を立てたが、従兄の方が力は強い。両手は容易く宙に浮き、次の瞬間目の前に火花が散った。背中から胸へと突き抜ける重い衝撃に、息が詰まる。

「な……!」

痛みに声も出ない。背中から土間に落ちた辰史は、したり顔で見下ろす丑雄を睨み付けた。

「てめえ……！ やりやがったな、丑雄のくせに！」

「怒るな。可愛い冗談だ」

唇が満足げに微笑む。先までの自分も同じような顔をしていたことは忘れて、辰史はカッと毗まをりをつり上げた。他人の勝ち誇った笑みというのは、どんなに自分と似ていても無性に腹が立つものだ。

「上等だ。表に出ろ。泣くまでぼっこぼこにしてやる」

「それよりも先にお前が泣き出すだろうな。鏡で見ても。もう涙目だ」

良く似た二つの顔が睨み合い、罵り合い、終いには取っ組み合いが始まる——

もう日常の風景と化したそのやり取りを眺めながら、尊は軽く嘆息した。

式神が出ないだけ、今日の二人は落ち着いているのだろう。多分。と、自信と威厳に満ちたこの老人にしては珍しく曖昧あやまに呟く。先まで浮かべていた奇妙な笑みは、疾うに消え失せていた。

——まったく、手のかかる孫たちだ。

「もう少し、大人になってくれれば私も安心して引退できるのだけれどね」

そんな老人の密やかな呟きを聞いたのは、式神だけだった。黒蝶は銀細工のような模様に入った薄い羽を動かして、肯定する。「やれやれ」尊はもう一度だけ溜息を吐いた。

「辰史、丑雄」

仲が良いのか悪いのか分からない、孫たちの名を呼ぶ。同時にびたりと動きを止めた二人の顔が、ぎこちなくこちらを向いた。年齢だけが違うよく似た二つの顔は、やはり同じように「しまった」という顔をしている。そんな孫たちを見ると、叱るに叱れなくなってしまう尊だった。

「今はそれくらいにしておきなさい。仕事が先だ」

ともすれば、孫を甘やかす祖父の表情になってしまう顔を引き締める。

「はっ」

二つの声が揃った。——瞬間、孫たちが嫌そうに顔を見合わせたことには気付かぬふりをして、尊は「よろしい」と大きく頷いたのだった。

立ち読みサンプル
はここまで